



NO.438

R6年2月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「突然の…」

施設長 木下昭二

年始早々に発生した能登半島地震において、被災された皆様に対してお見舞いを申し上げますと共に、ご家族を亡くされた方々へ謹んでお悔やみ申し上げます。

同じように7年10か月前に熊本地震を経験している私たちとしては、その時の「恐怖心や混乱」、「いつまで続くのだろう」という見通しの立たない「不安」、その後の「大変だった思い…」が、昨日のこのように思い返されました。被災された皆様には不謹慎な発言となってしましますが、その後毎日のように続く被災地の報道に目を背けたくなることもありました。その行動の意味は自分でも上手く整理出来ていないのですが、約8年という時間を経いても、まだまだ本当の意味での自身の（気持ちの上での）完全な復旧・復興に至っていないのだ…という受

け止め方のような気がします。

理由は色々あるのですが、やはり一番の理由は、自然災害においては「突然にして人の命が奪われる…」ことに繋がるということです。今回の能登半島地震の場合も、新年を敵かな気持ちで迎え、誰もが新たな今年1年の初めに当たって、どのように過ごそうかと、夢と希望をもって過ごした元日の朝の数時間後に、「まさか最愛の家族との惜別の時が来る」とは、誰も思っていない中で一瞬にして生死の分かれを強いる状況を与える神様は、本当に残酷なことをするなあ〜と常々思っているくらいだと思います。

私事ですが、数年前の12月の中頃、勤務中に母親が「救急搬送された」との電話が入り、早退して病院に向かいました。最初に向かった郡部の病院で「大動脈解離」と診断されましたが、緊急オペには「対応出来ない」と言われ、そのまま熊本市内の

病院に転送されました。Dr.から病状と母親の現状についての詳細な説明があり、姉と二人で聞きました。動揺していたこともあり、しっかりとした理解は出来なかったと記憶しています。

その時の話して、母親が高齢だったこともあり、Dr.からは「手術しても助かるという保証はありません」（手術に母の心臓が耐えられるか解らない）、であるのならば、「このまま見守る（天寿を全うする）ことも選択肢の1つです。」との説明でした。そのもう1つの意味は、助かる可能性が低いのであれば、「わざわざ母の身体にメスを入れる（傷を付ける）ことなく、綺麗な状態で看取ることが出来る…」とのことだったと思います。一刻を争う状況から、ゆっくり考えている時間などなく、しかし悩みに悩みました。結果、やはり家族としては例え数%でも助かる可能性があるのならば…という思

いから、手術して頂くことを選択しました。しかし、自然災害における「被災」の場合、悔しいことに「考えること」や「選択すること」すら与えてくれません。暮らしてや住み家ばかりでなく、ついさっきまで傍にいて元気に会話していた人が、本当に一瞬にして「奪われる」ことを受け入れるなんて出来ないし、憤りを感じるし、無力な自分にただただ「なぜ、神様はこんな試練を…」と嘆き悲しみ、苦しむことしか私には出来ないように思います。

しかし、「突然の別れ」は誰にでも起こりえることだということを理解しておかなければなりません。そして、一日一日、生かされていることにありがたみを感じ、日頃から支えてもらっている身近な家族を始め、多くの周りの方々に感謝しつつ、いざという時に利用者さんを守り、周辺の助けが必要な立場の方々、社会的に弱者と言われる立場の人たちに手を差し伸べ、助けられる法人・施設、自分自身であり続けたいと思います。



2月



「宝探しのいちご狩り」

少し前の話になりますが、クリスマス前のレクリエーションでいちご狩り体験をしました。利用者さんスタッフ含め食べるのが大好きです。昼食後にバスで移動し、いちご狩りをしました。利用者さんも早く食べたい気持ちを抑えて、いちご園のスタッフさんの説明を真剣に聞いています。説明後少人数で一列になり、赤いいちごを探します。

初物のいちごを食べることができて幸せと思いながら、いちごをEさんとOさんに手渡しました。二人とも笑顔で食べられています。別の利用者のTさんは慎重に自分でいちごを選んでいました。私も一個頂きました。あれ？採りたてで新鮮だからでしょうか、市場に出る前なので貴重な初物ですが、私には酸味を感じました。沢山ある中から甘いいちごを探して、いちごの列を行ったり来たり、宝探しのように一喜一憂しながらいちご狩りを楽しみました。次もおいしい食べ物をみなさんで食べられるレクリエーションでありますように。

支援員 原田 直美



「成長出来ているのか」

今年で入職して二年目になり、一年目よりも仕事を任される機会が多くなりました。一年目の時では考えられなかった、班活動の主軸としての役割を任されたり、後輩と一緒に食事の支援をするなど責任が出てくる仕事が増えてきました。自分自身成長できたかと問われると、あまりできていないのかなと思うこともあります。ですが、仕事を任されることを良いプレッシャーに感じ期待されている役割の意味を一つひとつ考えながら、三年目も利用者さんと頑張っていきたいと思えます。

最近、利用者と関わる中で、嬉しいことがありました。私が担当をしているSさんが約二年振りに会えていなかったお父様と会うことが出来ました。短時間でしたが、ご自宅でのSさんの様子を見る事ができ、お父様もSさんもとても嬉しそうに見えました。利用者さんにご家族のニーズを実現できたことは自分の成長した点だと振り返ると共に、それは仕事へのやりがいやモチベーションに繋がると感じたエピソードでした。

支援員 白石 峻真

「ピンチの時に頼りになります」

三気の里では年末からインフルエンザが流行しました。本来であれば、1月4日からの作業スタートの予定でしたが、予定を変更し、休日日課となってしまいました。しかし三班の内職作業は相手方の業者さんのこともある為、作業自体を止めることができず、通常の日と同様の毎日40箱程の作業製品が来ていました。在宅からの利用者さんとスタッフ4名で黙々と作業をしていました。次は作業製品を箱詰めした物を車まで運びます。そこで20代の若き男性利用者さんに車まで運ぶお手伝いをお願いしたら、いつもはなかなか席を立てずに静観されているのですが、先輩方が居られるからでしょうか、この一週間は自分の出番と思ったのか、どんどん箱を車まで運んでいただきました。運んでいる時もニコニコ顔で、頼もしいRさんの姿を見られた一週間でした。

支援員 園田 真紀

「守りたい幸せ」

私はAさんという三気の里で最年長となる78歳の利用者さんの担当をさせて頂いています。初めてお会いした時から、ご高齢とは思えないほどテキパキと動かれ、よくお喋りし、笑顔がとても素敵な方でした。しかし、78歳ということで1つの大きな怪我や病気で大きく崩れてしまうのではないかと、という心配が常にありました。実際に昨年コロナに罹患され、咳の後遺症と疲労感がひどくて、日々身体に大きな負担がかかっていた。

何とか体調が整った昨年11月には2人で大分まで旅行に行き、本人の好きなものを食べたり観光を行うことが出来ました。お花が好きなAさんは、特に花公園で一面の花畑を見た時笑顔が溢れており、匂いを嗅ぐなど楽しんでいた姿がとても印象的でした。

新年の様々なニュースを見聞きし、突然たくさんの人の幸福が奪われてしまうことに恐怖を感じることも少なくありません。そのため本人が幸せだったと思えるように、一緒に色々なことを楽しみ、日々支えていければと思います。

支援員 植野 希



「活力」

年末年始と感染症が流行ってしまい、新年から班活動が休みになってしまうことがあり、年の始まりは少し遅れてしまいました。1月16日からの活動開始になってしまい皆さんに合うのは久しぶりだったのですが、新年のあいさつを皆さんしっかりとしてくれました。Hさんは自宅で挨拶を練習していた様で、挨拶を一人一人にしてくれました。新年あけてから様々な災害が起き、気が滅入るようなニュースが多かったのですが、皆さんと久しぶりに会うことが出来、また今年も皆さんと一緒に楽しいことを見つけて活動していきたいなど、活力になりました！今年は創作活動や体を動かしたりと、健康にも気を付けながら楽しめる活動を探して行っていきたいです！

支援員 石原 佳奈

療育雑記

「月」

部長 松本慎太郎

『深い森の奥にある重度障害者施設。ここで新しく働くこと

になった堂島洋子は“書けなくなった”元・有名作家だ。彼女を「師匠」と呼ぶ夫の昌平と、ふたりで慎ましい暮らしを営んでいる。洋子は他の職員による入所者への心ない扱いや暴力を目の当たりにするが、それを訴えても聞き入れてはもらえない。そんな世の理不尽に誰よりも憤っているのは、さとくんだった。

彼の中で増幅する正義感や使命感が、やがて怒りを伴う形で徐々に頭をもたげていく――。』(映画「月」オフィシャルサイトより)

2016年7月26日、神奈川県相模原市にある知的障害者施設で元職員の男が入所者ら19人を殺害、26人に重軽傷を負わせた事件が起きました。その実際の障害者殺傷事件を題材にした辺見庸による同名小説を原作に映画化

がなされ、昨年の10月に公開されました。観たという方も少なくはないのかなと思います。「世に問う大問題作」と銘打っていたように、公開後から賛否両論が飛び交っていたと認識しています。皆さんにも色々な感想、考察などあるかと思っています。

映画の中で、施設は森の奥にありました。木々に囲まれた舗装のされていない道を主人公は歩いて出勤します。施設は夜になると特に暗く、利用者の部屋には鍵がかかっています。例えば外国の映画で、日本を表現した時の「こんなじゃない」と感じる同じような感覚でした。しかし、そのような設定はあえての演出かと思いますが、世の中の人からして見れば、施設とは、こんなイメージなんだろうと思います。実際、人里離れた所にあたり、暗かったり、鍵をかけていたり、暴力があったり、障がいへの理解がなかったりすることがあるからだと思います。ある意味、事実即しているのかもしれませんが、そのため、私たちは、そういうつもりではないことも、あの映画

のように見えている、感じられているんじゃないかと思えます。このようなイメージでは、楽しいとか、やりがいがあるとか、働きたいとか思えないだろうと思います。そして私もそのイメージを作っている一人だとも思います。

私たちはいつでも、映画「月」の中の施設になりえる。実はなっている部分もある。私たちはいつでも、「さとくん」になりえる。実は人を殺さないまでも、なっている。そう思わなければならぬ。その危機感を常に持ち続けなければならぬと、この映画を観て、何より感じたことです。明日は我が身です。人材不足、人間関係、コロナやインフルのクラスター、高齢化・重度化・重症化への対応、災害など今起こっている様々なことがきっかけで、職員が「さとくん」になったりすることもあるのだと思います。居てほしくないですが「さとくん」はいつも私たちの隣にいます。本当に色々なことがありますが、曖昧でもゴールを作って喜びを感じ合い、チー

ムでもって助け合い、一つ一つ乗り越えて、身も心もある程度健康であるよう努めていければと思います。



の工便り

「穏やかな日常」祈りと感謝」

新世話人 寺田ひろみ

新の皆さんは、年明けにコロナ感染の心配から、一週間程は居室で食事を摂って頂くような生活をされました。

16日に久しぶりに皆さん元気に出勤され、夕方笑顔で帰ホームされました。

リビングでは「100%勇氣」と歌いながら、元気にエアロバイクを漕がれるSさん。食卓でゆっくりお茶を飲み「美味しいです」と目を細められるTさん。洗濯物をたたみながら懐かしの曲を聴かれるNさんとそれを一緒に楽しめるMさん。リビングの整理整頓をして下さるHさん。いつもより生き生きとした表情の皆さんでした。

皆さんにとって変わらないいつもの生活は安心の空間です。夕方観ておられるテレビの地震速報に、「また地震があったって」「怖いです」「かわいそうねー」と、つぶやかれています。

私たちの日常の生活が送れる事に感謝しながら、皆さんと今

年も健康で仲良く過ごしていきたいと思えます。

震災の被害にあわれた方々が、一日も早く安心した生活を取り戻される事をお祈りしています。

衛生委員会

「衛生委員会」

支援員 久米善久

衛生委員会は、労働安全衛生の規定に基づき、設置が定められ、労働者の意見から、調査、審議を行い、快適な職場環境の維持、推進に向けて、有害な因子を排除し、労働者の健康障害を防止する為に、積極的な心身両面における健康の保持推進を図ることを目的として設置されています。毎月、産業医さん、保健師さんに職場内を巡視して頂き、危険な箇所はないか、衛生、環境面に問題はないか、あった際は指摘を頂き、改善に向けた取り組んでいます。

また、スタッフの健康診断、年に一度のストレッチエクササイズに、心身に問題を抱えた際は個別に産業医さん、保健師さんにケアも含めてアドバイスを受け、同時に職場内で改善、啓発が必要な点は、衛生委員会が

軸となり改善、啓発に努めています。スタッフの健全な心身が、利用者さんへの良い支援に繋がります。快適な生活へと繋がっていきくと捉え、今後もスタッフの心身両面における健康の保持増進に繋がるよう働きかけていきたいと思います。

栄養

「三気初の外国人調理師」

栄養士 前田 はる美

三気の里の利用者さんは、障がいの特性上、感覚的な過敏さや、こだわりがあります。そのため、アレルギーや病気による特別食だけでなく、きのこの食感が苦手、幼少期の嫌な出来事を思い出させる食材は省く、更には高齢化で嚥下機能状態によってとろみの硬さ調節など、その提供は多種多様です。

ところで、十年ほど給食を業者に委託していますが、今年度からフィリピンの方が在籍されるようになりました。先に挙げた特別食を担当されています。先日は、インフルエンザの隔離静養者への食事も、慣れない日本語を聞き取りながら柔軟に

応じていただきました。いつもニコニコと感じが良く、今では、利用者さんからカウンセラー越しに話しかけられる人気者です。このように、外国の方が働くようになり、時代の流れを感じていますが、一生懸命なその姿勢に国籍は関係なく、利用者のため、常に新しいことにチャレンジしていきたくないと刺激を受けています。



2月スケジュール

6(火) 田中Dr.ケースカンファレンス
 9(金) ゴールドクラブ
 芸術クラブ
 13(火) 苦情報告会
 15(木) 囑託医来診
 16(金) BeTREEレクリエーション
 4班レクリエーション
 5班レクリエーション
 アンパの日
 27(火) さんきマーケット

新型コロナワクチン接種

6(火)・7(水)・16(金)・20(火)・22(木)

毎週月曜日 訪問理容サービス

毎週火曜日 BeTREE役場販売

BeTREE

<営業時間>8:00~18:00



betree314

年末の様子

「鍋復活!」

事業課長 平川 聖子

グループホームの大みそかといえは「鍋」。この3年は鍋を囲むということができませんでした。今年こそはとおでんで「鍋復活!」を計画。各ホームとも早めに入浴を済ませてリビングでのんびりと過ごしましたが、おでんのいい匂いがしてくると、目線がキッチンに向き始め、「僕は玉子2個とウインナーがいいです」と食事前から注文が入りました。大根、ちくわ、ごぼう天、こんにゃく、白滝、玉子、はんぺん、変わり種のウインナー。熱々なのに急いで食べようとする人、次を取ってと指さしする人、美味しく楽しい食事でした。おでんの締めは年越しそば。かつおだしのスープも準備しましたが、おでんのスープがとていい味だったので、GH一はじめはおでんのスープでおでんそばにしてみました。そばの風味もそのままとても美味しく出来上がり、おまけに乗せたおでん種共々ペろりと食べてし

まいりました。

年明けはとも暖かく気持ちよかったです。散歩がてらに近くの玉岡神社まで初詣。年末年始に体調を崩された皆さんの回復と、今年一年の健康をお祈りしました。

相談談

「学ぶ姿」

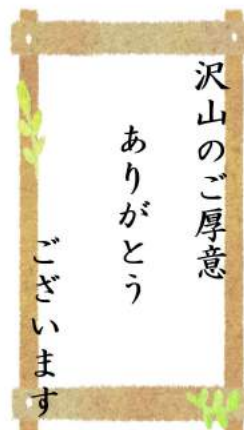
相談支援専門員 柚留木勝久

「1年後、夫の海外赴任先へ一家で移住するので力を貸してください。」ご相談に来られたお母様のお言葉に驚きが隠せず。お話を聞くと、赴任地の国では発達障がいに対する療育が未知数。だから1年かけて療育を受けながら、親として家庭で出来ることを学びたいとのことだった。お話の最中お母様の表情から、強い思いと決意が読み取ることが出来ました。その後親子療育の利用を開始され、療育以外に子育てに関する勉強会へ参加されています。

保護者の方々は、熱心に学ばれています。先日参加させて頂いた自閉スペクトラム症の理解と療育に関する勉強会では、多数の保護者が参加されていました。会の中では、保護

者の方から素晴らしい質疑もあり、

私は傾聴しか出来ませんでした。障がい福祉に携わって24年：新人職員の時より、保護者の方の思いや学ぶ姿を見て尊敬する一方、自身の努力の足りなさを痛感します。信頼される支援者でいれるよう、今後も学び続けていきます。



沢山のご厚意

ありがとうございます

ございます

【寄付】

今池 隆則様 清田 栄一様

【寄付物品】

小牧 博則様 福永 敬子様
 中嶋 久枝様 赤星 央子様
 春野 宗敏様 宮本 眞一様
 森川 琇介様 ヤマモト 住建様

【後援会】

野崎 明浩様 白井 桂子様
 植原 郁子様

【VO】

西村 栄子様